

2022年2月13日（顕現後第6主日、C年）牧師メッセージ

「目を上げ弟子たちを見て言われた」

（ルカによる福音書 6:17-26）

司祭ヨセフ太田信三

主イエスが山で十二人の使徒を選び下山しました。すると、12人以外の沢山の弟子たちや、ユダヤのみならず広範囲からの人々が主イエスの話を聴くために集まってきました。イエス様は目を上げて、「貧しい人々は幸いである…」と語り出しました。この「目を上げる」という表現に、主イエスの人々への深い関心が表されています。主イエスのその眼差しを想像してみてください。その目に写っていたのは、12人の弟子たちだけではありません。集まった大勢の弟子や、おびたしい人々です。イエス様に聞かため、病をいやしていただくため何とかして主イエスに触れたい人々です。そこにいたのは、泣いている人、憎まれている人、飢えている人、貧しい人です。イエス様は、深い関心を持ってこの一人ひとりを見つめ、「あなたがたこそ幸いだ」と言われたのです。

今日の福音は、マタイ福音書では「山上の説教」で語られる箇所です。マタイでは山上で一部の弟子だけに語られた「幸い」の箇所ですが、ルカ福音書では、平地で沢山の人の向かって語られています。マタイでは、「こういう人々は幸いである」という言い方を主イエスはしますが、ルカでは「あなたがたは幸いである」と、目の前にいる「あなた」に向かって直接語りかけています。主イエスは、わたしたちのことを見つめ、心から思ってください、語りかけてくださる方なのです。心底、わたしたちが幸いであることを望んでくださる方なのです。人のことをそこまで思えるのは、親くらいでしょうか。いや、今の時代、それも確かではない。しかし、イエス様はそうなのです。主イエスの憐れみとは、人間としての同情というだけではありません。その憐れみは、神様の人間への思いそのものです。イエス様がこの世に来て、わたしたちと同じ肉体をとったのは、この神さまの深い愛情をわたしたちに伝えるためでした。主イエスの「あなたがたこそ幸いなのだ」という言葉こそ、神の思いの表れです。神様はわたしたちの苦しみを苦しみのままに終わらせない方なのです。そして、主イエスがそうなさったように、おびたしい数の人であつても、一人ひとりを見つめ、語りかけてくださるのが、わたしたちの神なのです。

しかし、今日の福音で見逃してはならないことがあります。それは、主イエスは「幸い」と語るときにも、「不幸だ」と語るときにも、「あなたがた」と語りかけている、ということです。わたしたちのなかに、「幸い」と「不幸」のそれぞれがあるからです。わたしたちの生きる現実、単純な二元論ではないのです。今悲しんでいる人が、明日には変えられるかもしれない。今お金がある人が明日には貧しくなるかもしれない。さらに言えば、今生きている人が、次の瞬間に死んでしまうかもしれない。ならば、今をどう生きるのか。主イエスの語りはそれをわたしたちに迫っているようにも感じられます。今日の旧約聖書にある通り、神を頼って生きるのか、それとも、富やこの世の権力に頼って生きるのか、わたしたちの歩みにはどちらもありえます。しかし、たとえば金持ちになる、幸

せになる、それを望んで誰もが得られるわけではありません。そして、たとえそれを手に入れ、金持ちになったとしても、明日はどうかかわからないのがわたしたちの命です。また、わたしたちは、どうして自分の存在を確かなものとするのでしょうか。お金によってでしょうか。この世で地位や名声を得ることでしょうか。一見そのようなものは、確かなものに思えるかもしれませんが。富に象徴される、この世の力を持つことは、明日どうかかわからない不安をごまかしてくれるものかもしれない。しかし、それは砂上の楼閣に寄りかかって生きるようなものです。そしてまた、それだけに幸いを求めようとするなら、人はそれを守ることに必死になります。お金を他者に分けない。名誉が傷つかないように、正しいこと曲げることだってありえます。何とかして自分自身に確かなものがほしいからです。それを守るために、自分の持っているものを困っている人にも差し出せない。しかし、そんな生き方をこそ、主イエスは「不幸だ」と言われるのです。なぜなら、「もう慰めを受けている」からです。「受けている」と訳された言葉は、商業用語です。借金の返済を受け終わり、負債者に何も要求できない、「十分に受け取った」ことを表します。つまり、今はもう誰にも何も分け与えていない状態を表します。富を貧しい者に分けて、自らの慰め、満腹、笑いのためだけに利用しているのです。しかし、自分の富だけを守ろうとするのではなく、他者と分かち合うなら、いつまでも「受ける」喜びがあります。

主イエスは何も、貧しくなりなさいと強迫的に迫っているわけではないのです。主イエスは、あなたがたはどう思うのか、とわたしたちに語りかけているのです。あなたの目の前に、あなたの近くに今悲しんでいる人がいるんだ。貧しさのなかに苦しんでいる人がいるんだ。だけどあなたは独り占めするのか？そのように、主イエスは語りかけているのです。それであなたの幸いは確かになるのか？あなたの幸いはそこにあるのか？そう問いかけているのです。そればかりではありません。今悲しんでいる人が慰められる時が来る。必ず来る。そう慰めながらも、今悲しんでいる人が喜ぶものになったとき、今度はあなたもまた独り占めしてはいけない、今度はあなたが分かち合いなさい、と言っているのです。

幸いも不幸も、わたしたちのなかにあります。富に頼るのも、権力に頼るのも不確かです。信仰を持たない人にとっては、神に頼ることだって不確かだと言われるかもしれません。しかし、ならば、神が示す道に一度かけてみてはいかがでしょうか。わたしたちが持っている富も、力も、お金や権力、それらに限らずどんなものでも、他者が今必要としているものをもっているなら、それを分かちあおうではありませんか。神が与えてくださったそれぞれの富を、力を持ち寄るなら、そこにこそ、神からの報い、喜び踊るほどの幸いがもたらされます。そこにこそ神の国は訪れます。わたしたちを憐れむ神は、この幸いとわたしたちを招き、そこに至る道をわたしたちに示してくださっています。この道を共に歩んでまいりましょう。